

---

# ペテン師マジシャン

testrip

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ペテン師マジシャン

### 【Nコード】

N2197U

### 【作者名】

testrip

### 【あらすじ】

留学する大学生の私は、胡散臭いシンタロウと、佐代子に囲まれてこれからも楽しく暮らしたい。ペテン師マジシャンはきっと皆の傍にもいます。

「無い物を出すなんて、出来るわけないじゃん！」

そう言つて、佐代子は聞かなかった。私は、そりやそうだと思いつつ、のんきにコーヒーを啜っていた。さしてこの論争に興味が湧かなかった。心の中は、穏やかなものだった。

「それを言っちゃあ、僕等の立場が無いよ」

両手を上げて、まるで降参するみたいにシntaxロウは笑った。それから「マジシャンだから、僕等は」と余裕の笑みを浮かべていた。彼の長めの髪が、バルコニーの風に晒されていた。佐代子は不服そうに、両の腕をぶんぶんと上下に振った。

「絶対仕掛けがあるんだよ！ お姉ちゃんもそう思うよね」

十も離れた妹は、一生懸命にせがむような視線を向けてきた。可愛いもので、いつも私は、佐代子の味方をしてしまふ。それも、もうすぐ終わってしまうと思うと、寂しかった。

「そうだね。何かあるんでしょ？ シntaxロウ」

「綾子までそれを言うのかよ」

困ったな。と中学時代の同級生は、あの時と変わらぬ仕草で頭を掻いた。卒業してすぐに、マジシャンの下へ弟子入りした彼を、皆は驚きや羨望、あるいは呆れた思いで見守っていた。

そして、まだまだ無名の彼に、佐代子が元気が無いと相談したのは、私だった。シntaxロウ、正しくは真太郎なのだけれど、芸名な

のか何なのか、片仮名になってしまった彼は「丁度、新しいのが出来たんだ！」そう言って、私達の家へ押しかけて来た。そうして披露したマジックが、この論争の火種だった。

何も持っていない筈の手の平から、出てきた物は五百円玉。そんなマジックだった。

「饞別代わりに教えなさいよ。タダで五百円玉が手に入るマジック」  
「教えなさいよ！」

口調を真似るようにして、佐代子はシンタロウに詰め寄っていく。私だけ椅子に座っていて、実際は低いのだけれど、何だか高みの見物をしているようだった。

「佐代子ちゃんは綾子そっくりだなあ」

後ろにじりじりと、佐代子から離れるように下がりながら、シンタロウはちらりとこっちを向いた。自分でも、佐代子は私に似てきたと思う。しかし、それはどういう意味だろうか。実際は、訊かずとも分かっていた。

「どういう意味よシンタロウ！」  
「そーいうとこだよ」

机に、前のめりになりながら叫ぶと、シンタロウは色を濃くして笑った。安堵したようにも見える表情が、私の中でも弾けた。形の無い、漠然とした色々な不安が、消えるまでとは言わなくとも、色が付いていって、怖くはなくなっていく。

「ほんとにお姉ちゃんに似てる？」  
「ああ、似てるよ」

ぱつと明るくなるといふのは、こういう事を言つのだらう。佐代子は「シンタロウ！」と嬉しがって彼に跳び付いた。少し小さめのシンタロウだけれど、いっぱしの男性というだけはあって、軽々と佐代子を持ち上げた。

そんなに嬉しいのか。

自然と頬も、気も緩んでいった。佐代子の安心しきった顔を、私は久しぶりに見ていた。そして、この笑顔が暫く見られないのかと悔しく思った。少し冷えた春の風が、存分にバルコニーに吹いた。

「シンタロウ、ちょっと佐代子看といて」

そう言つて立ち上がると、シンタロウは満面の笑みで「おう」と言った。佐代子はどこに行くの？ と目で訴えてきた。そんな気がした。私に似たくるりとした髪が、少し寂しげだった。

「トイレだよ。行ってくるね」

あんたは佐代子にだけ優しいわよね。と母さんが笑っていたのを思い出した。トイレに行くのにも佐代子に確認を取ってしまう私は本当に重症だと思った。いつてらっしゃいの代わりに、佐代子はシンタロウに抱えられながら、小さく「うん」と言った。それを聞いてから、私はバルコニーを後にした。

廊下を歩いていると、不思議な気分に陥った。

佐代子がトイレに一人で行けるようになったのは、いつ頃だったろうか。そんな事を考え出した。そして、それは随分と前の筈なのに、私はどうしようもなく切なくなつた。一人で立てるようになったのは、お姉ちゃんと呼べるようになったのは、ケンジ君とやらを好きになったのは。いつだったろうか。

これじゃあ。

まるで母親みたいだと続けたかったけれど、それは違ふなとも思った。当たり前の事だけれど、私は佐代子を産んではないし、佐代子は私の事を、お姉ちゃんと呼ぶ。そして、母さんの事をママと呼ぶ。初めてママと呼ばれた時に、母さんは泣いたそうだった。私はその時、残念ながら学校にいたらしく、学校から帰宅した私に、母さんは嬉しそうに報告したらしい。でも正直、覚えていない。私が始めて佐代子にお姉ちゃんと言われた日も、覚えていない。ずっと、それこそ佐代子が産まれてすぐから、私は佐代子にお姉ちゃんと呼ばれていたような気がする。それは、錯覚以外の何物でもないのだけれど。私は母さんの娘である前に、佐代子の姉だという認識の方が、強い。繋がっていると感じるのは、離れ難いのは、佐代子だ。不思議だと考える内に、バルコニーへと戻っていた。私の顔をガラス越しに見るや否や、佐代子は急いでシントロウに耳打ちした。何だろう。

ぼんやりとした頭で、その様子を見ていた。シントロウの表情は此方からは見えない。見えるのは私と同じ位の背丈をした、後姿だけだ。あと、佐代子の嬉しそうな顔。

何かに気付いたときには、私は笑っていた。佐代子が嬉しそうにしている。私がいなくとも、変わらずに笑顔を見せてくれている。さつきも佐代子を笑顔にしてくれたのは、シントロウだった。馬が合うのだろうか。

負けたような悔しさよりも、安堵で心を埋めてから、バルコニーへの扉を開けた。

「ただいまー」

あえてさつきの耳打ちは見なかった事にした。子どもにとっての秘密は、ほんとうに大切なきらきらした物だからだ。それを目の前で踏みにじるのは不粋だ。大人は子どもの秘密を、大きく包んで、返してあげるべきだと思っている。

「おかえりっ」

ちよつとだけ浮いた視線と、わざとらしいくらいの笑顔。子どもはこんなにも分かりやすい。

シンタロウは私と佐代子の様子を交互に見てから、また頭を掻いた。先よりは愉しげにしていた。

近づいて来た佐代子の頭を撫でていると、吹いた風が冷たく感じた。顔を上げて辺りを見渡せば、日が落ちていつていた。

「そろそろお部屋に戻ろっか」

促すように佐代子の背を押した。シンタロウにも視線をやれば「そうだな。俺はそろそろ帰るよ」と言った。

「新作も披露出来たしな」

「そう。ありがとね、今日は」

「シンタロウ！またマジック見せてね」

その言葉を聞いて、驚いた。先まで散々「出来るわけが無い！」と大声を上げていたのに。シンタロウのマジックが見たいと言うだけなんて。

さては種を明かしたのか、それとも佐代子の納得する理由を述べたのか。種を明かして佐代子が理解出来るとも思えないので、きつと何か適当な五百円玉の出現する理由を教えたのだろう。

「うん。またいつでも見せてあげるよ」

「約束だからねっ！」

妙に誇らしげなシンタロウと、期待に目を輝かした佐代子が奇妙

に感じられた。そんなにもマジックで何か通ずるものがあつたのだろうか。

「そうだね。また来てよ？ 私がいなくていいよさ」

詰まりながらだつたけれど、言いたい事の二割は伝えられた気がした。私がいなくても、佐代子に会いに来てあげて、笑顔にしてあげてほしい。

「ああ、あとでおばさんに僕の番号とか伝えといてくれないかな？ 佐代子ちゃんとの約束だから」

「いつでもマジック見せてあげるっていう？」

「まあそんなとこだよ」

「なっ？」とシンタロウが佐代子に目配せをすれば「ねー！」と佐代子も返事をした。

「ふーん……」

そのやり取りが面白くない気がしたが、怒るほどでもなく、大人しくシンタロウを見送った。シンタロウが玄関から見えなくなるにつれて、佐代子の私の手を握る力が込められていった。吹いた風は、決して冷たくも、温かくもなかった。ただ左手は温かかった。

オーストラリアに留学して半年後、シンタロウから手紙が届いた。

『この手紙を開いたあなたへ  
一ヶ月以内に佐代子ちゃん家の扉を、叩いてあげて下さい。

追伸

佐代子ちゃんには教えたけど、僕が強く願えば手の平から五百円玉だつて出せるし、留学して遠くへ行ったお姉ちゃんを寂しくなれば出す事も出来る。

それがあのマジックの種さ。』

これはアシスタント料をがっぽりいただかないと。  
そう考えて笑った。強く願えば出てくる、そんな便利な五百円玉をたくさん。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2197u/>

---

ペテン師マジシャン

2011年10月3日01時32分発行